

# 目次

第1章 マンガ連載から映画へ。『風の谷のナウシカ』 9

第2章 スタジオ設立と『天空の城ラピュタ』 27

第3章 前代未聞の2本立て。  
『となりのトトロ』と『火垂るの墓』 47

第4章 『魔女の宅急便』のヒットと社員化 67

第5章 新生ジブリと『おもひでぽろぽろ』 87

第6章 『紅の豚』『海がきこえる』と新スタジオ建設 107

第7章 『平成狸合戦ぽんぽこ』と撮影部の発足 127

第8章 近藤喜文初監督作品『耳をすませば』と  
ジブリ実験劇場『On Your Mark』

147

第9章 未曾有の大作『もののけ姫』

171

第10章 実験作『ホーホケキョ となりの山田くん』への挑戦

209

第11章 空前のヒット作『千と千尋の神隠し』

227

第12章 三鷹の森ジブリ美術館の建設と徳間康快の死

257

第13章 新人監督による2本立て。  
『猫の恩返し』『ギブリーズ episode2』

269

第14章 時代を反映した『ハウルの動く城』とジブリの独立

291

第15章 新人監督宮崎吾朗の『ゲド戦記』

315

第16章 人間が手で描いた驚きに満ちた『崖の上のポニョ』

341

第17章 米林宏昌を起用した『借りぐらしのアリエッティ』

357

第18章 時代の変わり目の渦中に作った『コクリコ坂から』

377

第19章 力を尽くした『風立ちぬ』。その後の引退と再始動

399

第20章 8年の歳月を費やした『かぐや姫の物語』

425

第21章 若手監督を中心にした新制作体制の編成  
『思い出のマーニー』

453

第22章 高畑勲が支え、導いた  
『レッドタートル ある島の物語』

471

第23章 ジブリ初の3DCG作品『アーヤと魔女』

487

第24章 宮崎駿82歳の新たな挑戦『君たちはどう生きるか』

505

あとがき 終わったことはどうでもいい。 鈴木敏夫

522

参考文献

525

スタジオジブリ年表

534



# 第1章

マンガ連載から映画へ。『風の谷のナウシカ』



1984年3月11日、全国東映洋画系の劇場で、映画『風の谷のナウシカ』の公開が始まった。徳間書店と博報堂の共同製作。原作・脚本・監督はアニメーション映画監督の宮崎駿。みやざきはやお  
またプロデューサーには宮崎と活動をともにしてきたアニメーション映画監督の高畑勲たかはたいさおが名を連ね、さらに製作委員会のメンバーには、現在スタジオジブリでプロデューサーを務める鈴木敏夫の名も見える。

アニメーションスタジオ、スタジオジブリは、1985年にその活動を開始し、2023年公開予定の『君たちはどう生きるか』を含め、多くの長編アニメーションを制作してきた。ジブリ設立以前に制作された『風の谷のナウシカ』は、その後、スタジオジブリ誕生へとつながる大きなきっかけとなった作品である。

### 📁 『アニメージュ』発の映像化企画

『風の谷のナウシカ』は、徳間書店発行のアニメ雑誌『アニメージュ』で、1982年2月号よりまずマンガ連載がスタートした。当時、宮崎は、東京ムービーの関連制作会社であったテ

レコム・アニメーションフィルムに所属しており、「シャーロック・ホームズ」を原作とするイタリアとの合作テレビアニメ（後に『名探偵ホームズ』として発表）の準備中だった。しかし合作は企画がなかなか進行せず、時間的余裕のある時に『アニメージュ』編集部が連載を依頼、スタートした企画だった。

『アニメージュ』編集部と高畑、宮崎の接点は、創刊号（1978年7月号）まで遡る。「アンコールアニメ」というコーナーで、二人が参加した『太陽の王子 ホルスの大冒険』を取り上げようと、副編集長の鈴木敏夫がコンタクトをしたのがきっかけだった。この時は二人に取材を断られたものの、その後『アニメージュ』は、宮崎の『ルパン三世 カリオストロの城』、高畑の『じゃりん子チエ』などを積極的に誌面で取り上げた。それを通じて『アニメージュ』編集部は、高畑、宮崎、それに二人の東映動画（現・東映アニメーション）時代の先輩で、『カリオストロの城』『じゃりん子チエ』で作画監督を務めた大塚康生と次第に親交を深めていった。

1981年8月号に掲載された大特集「宮崎駿 冒険とロマンの世界」は、こうした親交を深めていく過程で成立した31ページに及ぶ大特集だった。この特集で宮崎が提供したさまざまなイメージボードの中には、映画企画用として描かれたものが多数あった。

そこで『アニメージュ』編集部は、宮崎の映画企画用イメージボードの一つをもとに『ハヤオ戦記』と『戦国魔城』とタイトルをつけた企画書をまとめ、1981年7月に開かれた徳間グループ関係者による「映像会議」に提案した。

『アニメージュ』を出版していた徳間書店は、そのグループに映画会社「大映」、レコード会社「徳間音楽工業」を持ち、メディアクロス（現在のメディアミックスに相当）にも積極的な姿勢を見せていた。「映像会議」はこれら関連企業の関係者が集まってメディアクロスの中核をなす映画企画を検討する会合だった。

しかし、「原作がないものを映画にして当たるわけがない」という大映サイドの判断から、『ハヤオ戦記』と『戦国魔城』の映画化は見送られることになる。

### 📖 話題を呼ぶマンガ版『ナウシカ』

「原作がない作品は映画化できない」。映像会議の結果を『アニメージュ』編集部から伝えられた宮崎は、「じゃあ、原作を描いちゃいましょう」とマンガ連載の検討をはじめた。その経緯を、鈴木は次のように語っている。

どういふマンガを描くかについていふところから話したんですよ。それで自分が何をいったかよく覚えていふんですけれど、『大河ドラマやりませんか』っていったのは僕でした。なんでかというのと、そのころ少年誌はじめ、流行<sup>はや</sup>っていたマンガがみんなちまちま、まじっていたんですよ。ラブコメ全盛時代で。一番象徴的なのが『タッチ』。そういうのじゃなくて、もっと大きなドラマをやりませんかかっていって。それで僕がいったのは、梶原一騎<sup>かじわらいつき</sup>の発明で、読み切り連載というマンガの描き方があるけれど、僕はマンガ雑誌じゃないから、このマンガによって雑誌の人氣が左右されるわけじゃない、だから好きなものを、面白いものを、連載だとかそういうことを意識せずに好きなように描いてくれと。そういうものをよく覚えていますね。

(『風に吹かれて』)

鈴木はこの提案を受けて、宮崎は壮大なストーリーのマンガ連載を構想し始め、それが今日の『ナウシカ』となっていく。こうして連載の大きな方向性は決まったが、次なる課題として、どのようなタッチの絵にするかも検討しなければならなかった。そこで宮崎は鈴木を阿佐ヶ谷<sup>あさがや</sup>の事務所「二馬力<sup>にばりき</sup>」に呼び寄せ、3種類のタッチで描いたマンガを見せることにした。

一つは、緻密に描き込まれたもの。宮崎曰<sup>いわ</sup>く、このタッチだと1日に1枚も描くことはでき

ない。二つめは、描き込みがそれほどないもの。これならば1日30ページは描ける。そして、三つめに提案してきたのは、一つめと二つめの中間のタッチだった。

この宮崎の提案に対して、鈴木が選んだのは緻密に描き込まれた一つめのタッチ。生産性よりも、マンガそのものとしての質を追求すべきという考えに迷いはなかった。そういったやりとりを経ていくうちに、やがて宮崎の心境にも変化が表れてきたと鈴木は述懐している。

宮さんは本当にまじめなんですよ。「映画の原作を作っちゃおうか」ということではじまったのに、彼は悩むんですね。

こんなことを言うんです。「鈴木さん、映画企画が前提にあつて漫画を描くというのは、これはやっぱり漫画に対して失礼だ。そんなつもりでやったのでは漫画として失格で、誰も読んでくれないんじゃないか。漫画としてちゃんと描く」。宮さんはいつもそうですが、いくつか選択肢がある場合、結局もっともまじめな方向で決断するんです。（『仕事道楽』）

こうして連載がスタートしたマンガ版『ナウシカ』は一部で大きな反響をもって受け入れられたが、1982年8月に出版された第1巻は初版7万部のうち、2万部の在庫を残す結果と

なった。当時は、『週刊アサヒ芸能』が60万部を発行し、マンガ雑誌であれば24万から30万部が売れる時代。単行本の売り上げとして見ても、『ナウシカ』のこの結果は成功とは言い難かった。しかし、売り上げとは裏腹に、同時代のマンガ家たちに与えた影響は大きく、当時、『AKIRA』を連載開始したばかりの大友克洋かつひろは、雑誌『バラエティ』1982年5月号で「とにかく宮崎さんの絵のうまさね、人物の表情、デッサンがうまいという段階ではなくて、絵の見せ方を知っている。今のマンガが失っているマンガ本来の楽しさが、アニメをやっていた人たちの作品から出てくるのは、いったいどうしてなんだろう」などと、コメントしている。また、少女マンガ家、竹宮恵子けいこはマンガ誌『プチフラワー』1983年1月号の、「まんが家を選ぶ面白いまんがは」というアンケートで『ナウシカ』の名前を挙げ、後に「同業者としての直感で、『これはなにかちがう世界が始まるんだ』という予感がありました」と語っている。

一方、連載準備中の1981年11月より『名探偵ホームズ』の企画が再始動したが、『ホームズ』はこの後、4話分のフィルムと、2話分の動画作業が終了したところで中断してしまう。このような状況の下、宮崎は、1982年11月にテレコムを離れ、フリーとなった。

## 📌 10分間のパイロットフィルムから映画へ

『ナウシカ』連載開始から半年が経った頃、『アニメージュ』編集長である尾形英夫の発案により、『ナウシカ』の5分間のパイロットフィルムを制作、当時『アニメージュ』が日本武道館で行っていたファンイベント「アニメグランプリ」で上映しようという計画が持ち上がった。しかし、さすがに5分では何も描けないという宮崎の意見もあり、これが10分に。さらに、鈴木が当初の目論見である『ナウシカ』映画化を改めて提案し、尾形、宮崎ともにこれに賛同した。

『スタジオジブリ作品関連資料集Ⅰ』には、1983年3月22日の日付が書かれた「風の谷のナウシカ アニメ映画化 第2回打合せ」の資料が掲載されている。この資料を読むと、ストーリーについては、原作の前日談として「風使い」の訓練を始めたばかりの幼いナウシカを描くか、それとも原作に近いものにするのか、2案が併記されている。また上映時期についても1984年春と夏の二つが挙げられている。制作会社についての言及もあり、宮崎が所属していたテレコムのほか、『未来少年コナン』を制作した日本アニメーションの名前が候補として挙げられている。

その後、広告代理店、博報堂が徳間書店とともに共同製作することが決まり、映画化は本格的に始動した。なお博報堂が参加することになったきっかけは、徳間書店の和田豊宣伝部長が、博報堂の徳間書店担当営業部に偶然にも所属していた宮崎の弟、至朗しろうと面識があったという、意外な縁によるものだった。

「ナウシカ映画化」のニュースは、1983年4月23日、東京・日本武道館で開催された「第5回アニメグランプリ」の会場での徳間康快社長やすよしによる発表が、ファンへの第一報となった。その後6月20日に製作記者会見が行われた。